



風 狂

第 5 6 号

風 狂 の 会

風狂（第56号）目次

詩

山鳩の声	なべくらますみ
彷徨する秋	高村昌憲
林檎園	長尾雅樹
楽屋口	原詩夏至
海	出雲筑三
卒業式	高 裕香

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（四十）	三浦 逸雄
-------------	-------

エッセイ

老人の冷水（続き4）	北岡善寿
出版界への微風	神宮清志
鹿の変容——石原武詩の「鹿」について	高島 りみこ

翻訳

アラン『大戦の思い出』（二十二）	高村 昌憲 訳
------------------	---------

執筆者のプロフィール

デデッポッポー デデッポッポー
ナクヤツクイテエー

遠くに聞こえる山鳩の声に
あの時
背中で泣く孫を揺すり上げながら
歌ったことを思い出した
本当に泣きたいのは
婆さんだったかもしれない

眠っている子の布団を跳ねのけ
そのまま掴むようにして抱き
外へと飛び出した
家の軋む音を逃げる背中で聞いた

その日
朝から出掛けた家の者たちは
それきり誰も帰って来なかった
孫の父親も母親も
婆さんのもう一人の息子も

何とか崩れなかった家の中は
住めるものではなかったが
婆さんは住んだ
まだ親の声を聞きたい幼い孫と二人で

デデッポッポー デデッポッポー
ナクヤツクイテエー

遠くに聞こえた山鳩の声
婆さんはちょっと涙ぐむ
最近ようやく
夜中に突然うなされ
泣き出すことのなくなった孫
もうじき学校から帰って来る

一枝のたわみに
収穫のすべてを測ってはいけない
春の雨にぬれる
しとどの花の枝のつやから目をそらす
純情かれんという言葉のむこうに
ささやかなうたげのあとをたどればよい

宝石をころがして光のあとをおう
くさむらをすかして空をのぞく

幹のひだにきざまれた
ゆるされた過ぎた日のところをはらって
幻であってくればよいと願う
小さな花と花のささやきを
果樹園のもえるほのおの色に聞く

みちあふれた花びらの誇らかな時間は

いまの一瞬に花ざかりのかけろうがゆらぎ
つめたい日の思いをたぐっている

寒冷地のかるやかな姫君の願望は
そぼくのゆめを野の風におくり
土のひびきを葉の影にきざんで
草の声を小枝に聴かせている

天界のらくえんを宙にうかべて
生きることに酔っているか
夢に死んだ
世界を飛翔する
一面に咲ききそう炎の環から
ふるさとの春は充たされた幕を張る
蜜の味をかすかに鼻孔にただよわせて
とわのひとときを忘れるために
まばゆく散る
花の色

子供だった頃は誰も夢想の中にいた
色々な選択が可能な中で幻想を生き
結局は何も選択しないで夢見ていた
夢想しながら日が暮れた彷徨する秋

想像力が幻想となり現実でなくなる
想像力に身を任すのは現実の喪失だ
外国の地へ行く者に幻想はなくなる
様々な方法の一つを選択することだ

小屋を想像したい人の自然な営みは
実際に小屋を造ってみることである
歌を創りたいと想像する人の活動は
思い浮かぶ歌を先ず歌うことである

建築に必要なのは華美な服ではなく
これから建てたい敷地と材木である
詩や小説に必要なのも虚栄ではなく
美しい言葉とか書きたい命題である

想像力が現実から乖離するばかりで
幻想を消せない者は作品を創れない
結実する季節を曖昧にするばかりで
選択できない自己も作品を創れない

女達は偶像アイドルの名前に
気楽に「様」などつけ
屯たむろする
小雨の楽屋口に――

あたかも昔
校舎裏の小流れの畔に
かがみ込み凝然と見つめた
蛸おたまじゃくし 蚪の
無数の尾の戦ぎの
董色の
優雅な不気味さで。

そこにあるのは〈連帯〉ではない
――勿論、〈孤立〉でも。
蓋し
生きるとは
死ぬとは
こうして戦ぐことだ
小雨の降るこの〈宇宙〉の楽屋口で
「様」など勝手につけた何かを
あてどなく
優雅に待ちながら。

そこにあるのは〈信仰〉ではない
――勿論、〈自由〉でも。
あたかも今
彼女らが
尾を振り
戦ぎながら
茫然と待ち続ける何か
「様」などあってもなくても
畢竟
〈神〉でも〈恋人〉でもないように。

雨が降っている
毎日まいにちの豪雨
とうとうと三千万年ふり続く
その少し前までは
一面のマグマオーシャン
山や海には火龍が吼えていた

惑星や隕石も先を競って
雷鳴と閃光をとめない
寄せ集めの地球星になった

雨はなおも降りつづき
星たちの持参した水やミネラルのお陰で
いこいの海からささやかな命を得る

水分子には垣根がない
何でも溶かし融合をくり返す
全てを呑みこみ できた海

いまどき雨が降っている
そしていきなり豪雨になる
マグマは地中に潜り回遊を辞めない

風が不機嫌に波を呼ぶ
恩恵の黒潮は海の動脈
逆流する時は迫っている

2019年3月15日

今日は、ぼくの初等部の卒業式
綺麗にアイロンされた制服に手を通す

桜が花を咲かせたがっている
そんな桜の心をポケットに入れ
暖かな朝日を浴びた校門を父母とくぐった。

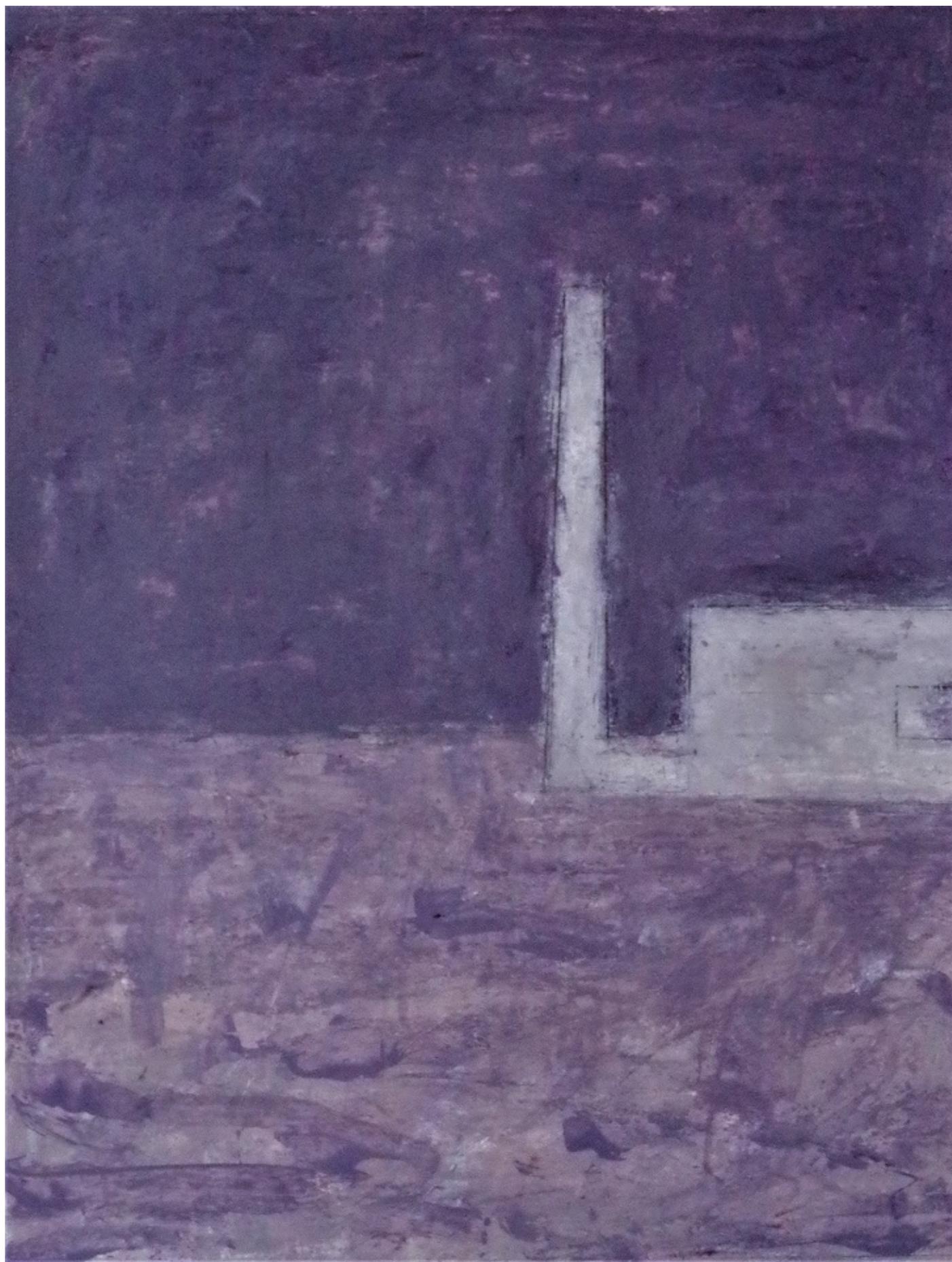
校長が変わると、なぜか卒業式も変わる
伝統の形式がないのだろうか？
あったのかもしれないがシンプル化。

『卒業証書授与』

担任から名前を呼ばれるが
皆、「ハイ！」と返事ができない。

代表だけが壇上に上り授与。
ぼくも、校長先生からもらいたかった。
父には、シャッターチャンスさえもない。

最後の校歌を歌い
涙することなく
桜の心だけ持ち帰った。



三浦逸雄 「ダンボウのえんとつ」 8号（アクリル・紙）2019

この新聞記事の中にはないが、昭和二十五年の講和条約後のことを触れておく必要がある。この条約はアメリカとの単独講和であり、中国もソ連も加わっていない。中国とは後に田中角栄が日中国交回復を打ち立てたが、ソ連からロシアに変わった国とはまだ平和条約を締結していない。戦争末期に連合国の首脳が集まってヤルタ会議をやりポツダム宣言をしたが、太平洋戦争が終る数日前に参戦したソ連は樺太と千島列島を、勝利の結果として獲得したのである。日本は千島列島は日本固有の領土だと主張する。聞こえのよい主張だが、千島は明治初期に榎本武揚が全権大使としてモスクワに趣き、買い取った二十二に及び島で、海産物が豊富であったから大儲けしたとロシア人は悔やんだと、作家のチェーホフは「サハリン島」の中で書いている。千島はそれほど重要ではなかったのである。それが今では変わった。ソ連は日本の戦時中、日ソ不可侵条約を結んでいたのだが、それを破棄して参戦し、その功績として樺太千島を獲得したので、不法に占領したという自覚はない。一旦獲得した領土を易々と手放す国はない。それに現在は沖縄に米軍基地があるので、その対応を常に考えているのである。国益を考えない国家はないのである。

話は横道に逸れたが、アメリカとの単独講和条約後の日本の政界の動きに戻ることしよう。昭和天皇の戦争責任問題は結局有耶無耶になったが、戦犯として巣鴨プリズンにいた軍人ではない政府要員も講和条約締結によって出所をゆるされた。その中に、現在の総理安倍晋三の祖父岸信介がいたのである。岸は商工大臣を務めた閣僚であった。岸は間もなく政界に復帰し、六十年安保の時の総理大臣であった。安保条約は講和条約のときに日本がくり付けられた柵であった。この柵を取り外さなければ真の独立はあり得ないという空気が燃え上がるように見えた。政府はその空気を抑えなくてはならない。しかし政府の手に負える勢いではなかった。最後はアメリカの力が働いて安保騒動に終止符が打たれた。岸は暴漢に太股を刃物で刺されて退陣した。

ここで一服しよう。岸の配下から矢張り戦犯の指定を受けて巣鴨プリズンに収容され、講和条約締結一年前にそこで病死した者があった。赤木桁平である。赤木はもとは漱石の所に入出入りしていた文芸評論家で、読売新聞に「遊蕩文学撲滅論」を書いたことがある。槍玉に挙げたのは、吉井勇、久保田万太郎、長田幹彦、近松秋江、後藤末雄の五名であった。遊蕩文学は世の中に害毒を流すから撲滅せよという主張である。名指しを受けた文人の作品は特別有毒とも言えないが、赤木は撲滅論を口にするほどの人間だから、やがて漱石の許を離れ政界に近づくのである。彼は岸信介の配下になって、確か関西で国会議員選挙に立候補して代議士になった。戦争に協力したことは勿論である。それが戦犯の指定を受ける要因であった。赤木は巣鴨で戦犯のまま病死したが、岸は病気もせず、講和条約締結とともに娑婆に出て、エリートの道を歩いたのである。おそらく巣鴨にいた者で、岸ほどに陽の目を見た者はあるまい。既に誰も戦争責任を取ろうとしない国になったのだから、民主主義と声高らかに言ってみたところで、空念仏たらざるを得ないのである。この政治的状況は現在も変わらないのであって、公文書改ざんが発覚しても、担当大臣は頬被りをして責任を取らない。この大臣は天皇制護持に凝り固まっていた吉田茂首相の縁戚の者だ。矢張りあの問題は何時までも付いて回るのか。この国は将来に向けての舵取りの決断を誤ったのであろうか。小説家の伊藤整は、「近代日本人の発想の諸形式」という論考を書いているが、その中で伊藤は、日本の近代化の機会は二度あったという。「明治維新と第二次大戦後」がそれだと伊藤は指摘している。ところが、この二つの機会とも「外から刺激され、支配者に都合のよいように上から与えられて、実質的に旧い生活の内容を受けついだものであり、民衆の側から起ったものでないことと関係がある」というのが論旨だが、伊藤が意識している近代化はヨーロッパの歴史のように思われる。矢張り敗戦は独立を失うことである。日本を統治するためにアメリカが行なったのは学制改革であった。私が子供の頃は、小学校だけが義務制であった。

その後は中学五年、高校三年、大学三年が普通科のコースであった。このコースは昭和二十七年頃に変ったように思う。中学は三年まで義務制になり、その上に高校が置かれた、学校に入り易くなったように見えた。教育の大衆化であり、精神文化のレベルアップと評価する向きもあろうが、識者の中にはこの改革を憂慮する人もあった。私の知る仏文学者で大学で比較文学を講じていた荒木亨氏は自分の主宰する学内の研究誌「シグノ」の中でこんな事を書いているところがあった。

「六三制、新仮名遣いで始まった戦後が、今その効果を現して来た。教育という目に見え難い領域は戦後生まれが大部分を占める二十一世紀になって、取り返しのつかぬ過ちを日々露呈している。日本語が崩れ、死のうとしていた時に、小学校から英語教育とは何という太平楽だろう。日本の大人の愚かしさをまともに受ける犠牲者が、何も罪のない子供である。しかし日本の教育は、既に戦前から「教育勅語」と「皇国史観」、「御真影奉安殿」の神話によって、軍部と文部官僚に独占され、根本の正しさを失っていた。戦後の新教育に人々が救いを感じたのはあながち間違いではない。しかし自民党に戦前教育の復活を願う「開国建て前、本音は攘夷」の古陋な守旧派が存在し続け、日教組の左翼偏向に刺激されて、教育を政治の争いの場として来た。この不幸が敗戦国の実体である。一時的に経済が復興しても、新幹線が走っても、魂を失った国の倫理的頹廃は止むべくもない」

折角だから荒木さんの文明批評を聞くことにしよう。

「……まだ数の観念のない孫の認識は、全てアナログである。それを契機にデジタルとアナログの区別を考える。後進国日本は、手っ取り早く追いつくために、デジタル（理系）を偏重しアナログ（文系）を潰して来た。偏差値、五段階相対評価、全てデジタルの世界で処理される。しかし本当の創造は先ずアナログから始まる。自然科学の場合も然り。このことに気付かなければ、失われた十年はこの先まだ続くだろう。戦後日本社会への絶望は深い。

ITの恐ろしいのは機械を無謬と信じ、それを故障と思わずに相手を疑うところにある。チャット殺人事件の女の子も、友達の真意より、チャットの文面を盲信する倒錯に陥ったのだ。コンピューターは理由なく誤り、その責任を必ず人間（ユーザー）に押しつける。これが知らず知らず人間（ユーザー）に伝染し、自分は正しく、悪いのは相手だという人間が蔓延する。子供の時からそういう条件付けられて育った人には、余程の智慧と意志がないとこの袋小路から抜け出せない」

こういう見通しを立てた荒木さんは残念なことに脳出血で仆れ、帰らぬ人となった。敬虔なカソリック教徒であった。（続く）

出版界ご難の時代である。本屋さんが最盛期の半分近くに減り、人々の本離れが止まらない。物書きたちに生活難が押し寄せてきている。有名作家も売れなくて困っている。取次店最大手の「日販」も、昨年はずいに史上初の赤字転落となった。出版社の倒産も相次いでいる。そんなときに…微風ながら追い風が吹いてきた。

健康長寿を願わない者があろうか。いくら長生きしても、寝たきりであったり、家族に多大な迷惑をかけたつ生きていたくない。「長生きは不幸の始まり」とは近藤啓太郎の名言だが、この現実をいかんともしがたい。俗にいう《ピンピンコロリ》で終わりたい。そのためになんだかんだとウルサイほどの情報が飛び交っている。

日本人の平均寿命は、男が八一歳、女が八七歳であるのに対し、健康寿命は男が七二歳、女が七四歳である。健康寿命とは、健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間、と定義されている。となると不自由な日常生活を送りながら、やがて要介護状態となり周囲に迷惑をかけたつ生きなければならないのが、男は九年、女は一三年あることになる。こんな長期にわたって、不自由な生活を強いられて生きなければならないとは、まさに「長生きは不幸の始まり」に違いない。

と、そんななかに…こんなキャッチフレーズが目にとまった。「食べ物よりも、運動よりも、決め手はこれだ！」さてこの決め手とは？それは「読書」だという。本を読む者がもっとも健康長寿だという意外性と驚異に満ちた報告である。それもNHKのAI（人工知能）の分析から導き出された結論だということから、妙に説得力があるではないか。四一万人の生活習慣や行動のデータを分析した結果見えてきたものが、意外にも読書する人がもっとも健康長寿だったとある。

長寿の一番といえば長野県が有名だけれど、それは平均寿命であって、健康寿命はほぼ全国平均である。健康寿命では山梨県が一番で、平均寿命は全国平均より少し上というデータが出ている。その山梨県は、人口に対する図書館の数がダントツの日本一だそう。しかも運動やスポーツの実施率は、なんと全国最下位。山梨県人はあまり運動せずに読書に耽って、健康寿命が日本一になったということだ。運動することとかが嫌いがちなインテリの方々には、とんだ朗報であろう。「ライオンはラジオ体操などしない」などと粹なことをおっしゃって、運動しないことを正当化しておられる紳士淑女には、大変な応援歌となろう。しかし、しかし、そうは言っていられないのではないだろうか。健康指南書の世界的ベストセラーであるワイル博士の『ナチュラル・メディシン』によれば「ほとんどすべての病気は運動不足からくる」としている。これは紛れもない真実であろう。適度な有酸素運動と筋トレ・ストレッチは健康維持には不可欠なのだ。

AIの分析によれば、読書は健康要素一一九と結びつき、不健康要素ゼロという完璧な健康要素である。この点では食事より運動より、最高の要素となる。ということはどんな食事でも健康にマイナスになる要素はある。運動も同じである。プロのスポーツ選手が意外と早死にであるという事実もある。健康という見地からするなら、運動というのは「過ぎたるは猶及ばざるが如し」の典型であって、「適度」こそ重要である。その点読書はそうした不健康要素が何もないという。このことは海外でも気付いていて、研究が進められつつある。

読書する人が健康長寿と聞くと、そう言われればそうだなあ、と思いがたるところがある。ゆっくり見渡してみると、思い当たる人が多いのではないだろうか。本や雑誌を読む人は「ヨガや散歩のグループに参加」「外出はほぼ毎日」「友人とよく笑う」といった指摘がある。いっぽう本を読まない人は「人生に嫌気がさすことがある」「社会に関心がなくなってきた」など数多くの不健康要素とつながっている。「心が動く」と体が動く」という言葉があり、何かやりたいきっかけを作るという意味でも、読書は健康要素となる。

と、この辺まで書いてきて「あっ」と思い当たるところがあった。人が老いるのは体が老いるとのみ思い込んできた。とくに筋力の衰えが老化を促進すると確信してきた。しかし老化は心も一緒に衰えるということだ。心の老化を忘れていた。気付いてみると心と体が同時に衰えているのだ。人間は心と体で成り立っている存在であり、その心と体のバランスが健康には不可欠であろう。心と一口に言っても具体的にはどういうことだろうか。にわか勉強して分かったことは、人間の頭脳には「右脳」と「左脳」があるということだ。右脳は理論、常識、言語を司り、読み書き、会話、計算、論理的思考をする機能をもっている。それに対して左脳は独創性、感性、記憶を司り、図形、映像などのイメージの認識、記憶、直観やひらめきの機能をもっているとする。しかも多くの人には左脳の機能を十分の一くらいしか使っていないという。このアンバランスが問題だろう。よって歳を取ったら、時間があるのだから、詠む、描く、聴く、奏でる、唄う、踊る、創る、といったことに時間を費やして、大いに左脳の開発に努めるべきであろう。

自分の心をコントロールすることくらい難しいことはない。古来人はみな自分の心との戦いに悩み、奮闘してきた。そのことの記録が無数に書かれてきている。その到達点の一つが宗教であったり、芸術であったりする。それらの遺産から心の栄養を取り込むことが大切であろう。それらが健康長寿に最も貢献すると言われれば当然のように思えてきた。老いるという現象は筋肉を中心とした体が老いるだけではない。心も老いるのだ。体が老い、心が老いる、これは不即不離の関係にある。そこで心の栄養を補うには、読書が最適の行為の一つなのだと思う。

まことに注目すべき健康論が出てきたものだ。この説が広まると、読書する人が増えて、その結果本が売れて、物書き、出版社、取次店から町の本屋さんまで幸せになれることになる。つまり出版界全体の追い風になるは必至。追い風になるように、しだいに微風から強風が吹き出すことを願うばかりだ。この健康長寿説に基づく読書のすすめを、大いに喧伝すべきであろう。

とはいえども、町の本屋さんには強敵がはばかっている。ネット通販がそれである。とくにアマゾンジャパンが厳しい。古書は神田まで行って一日足を棒にして探し回らなくても、検索するだけですべてが入手できる。格安で玄関まで運んでくれる。これに嵌ると、すべてがそればかりになり、本屋さんには出かけなくなる。アマゾンは日本で商売しながら、一切の税金を払わない。税務署に対して「アメリカの本社に聞いてくれ」と逃げている。その辺はグーグルも同じで、最近数十億円の脱税が報道された。アマゾンは本ばかりでなく、電化製品にも販売を広げ、ビックカメラのような量販店にとっても強敵となっている。町の電気屋さんの多くが廃業に追い込まれ、衣料品店も同じであり、その他各種の商品に手を広げ、近頃では食品まで扱うようになってきている。これでは商店街が消滅せざるを得ない。アメリカではスーパーマーケットの最大手も潰されてしまった。日本もそうなりかねない状況である。こうなると日本文化そのものも破壊されかねない。

グーグル・アップル・フェイスブック・アマゾンを総称して“ガファ”と呼ばれ、個人情報流出その他世界中で問題になっている。ヨーロッパでは規制に乗り出しているというけれど当然だろう。日本も諸々の自衛手段を講じないと乗っ取られかねない。

いま電車に乗ると、本を開いている人は稀だ。みなスマホを開けて、指先を器用に動かしている。ゲームとか、ラインとか、漫画などの世界に没入されておられる。いずれも「ガファ」の悪しき影響である。

その昔は本を開いている人が多数居た。通勤電車内というのは読書に最適で、そのおかげでずいぶんと読書したものだ。定年とともに読書量が減ったのは、毎日決まって電車に乗ることがなくなったからだ。以前の電車内では、週刊誌、新聞も盛んに読まれていた。「東スポ」といった新聞が網棚に乗っていて、あとから来た人がそれを読んで、また棚に上げて降りてゆくといったのが普通の風景だった。こうした週刊誌・月刊誌・新聞が売れない。このことが出版界全体を追い詰めている。

今やスマホ一辺倒になってしまった。この人たちが本を読みだすことがあるのだろうか、と考えると絶

望的になりがちである。しかしあるのではないか、という希望もなくはない。人の心など解るものではないし、まして流行などどう転ぶか分かったものではない。希望を捨てるべきではない。読書の意味をことあるごとに勧め、本を読む歓びを分かってもらうようにして行きたいものだ。それが日本文化を守り育てることにつながると認識したい。「本を読む人は健康で長生きです」会う人ごとにこう伝えたいと思っている。(了)

詩人・石原武にとって鹿は、単なる動物という枠を超えた特別な存在だ。『石原武全詩集』（土曜美術社出版販売）を中心に、鹿を題材にした作品から石原の「鹿」について考察してみたい。

全詩集によると石原の残した詩集は10冊に及ぶが、初めて鹿が主人公となって登場するのは4冊目となる詩画集『森の秘儀』（1979年）においてである。「舌」と題された詩を見てみよう。

豪雨の中で鹿は向かい合っていた／やがて崩れるように／美しい鹿が落葉の上に寝た／すると牝鹿は／その口もとにかがみ／白い息の中から／熱く舌をさしだした／森を圧する鋭い角に／雨が光り／触れ合うものに落ちた／神はなぜ／こんなにも美しい素裸ないのちの色と形象を／この肉片に与えたか／鹿はいくどとなく／情愛に身を震わし／闇にかえった／／森の奥に／いま／朝焼けの海がうねる

激しい雨に打たれる2頭の鹿。その鹿の白い息と赤い舌が暗い森の中で鮮烈に浮かびあがる。それらの色の対比、そして冷たい雨と熱い舌の対比が静かなるエロティシズムを呼び起こす。いのちの躍動は内的な森の奥で、鹿の姿となって密かに始まる。

2004年に刊行された詩集『飛蝗記』では「鹿の村」という章を設け、7篇の作品を載せている。この詩集の鹿たちは変幻自在に時空を越えていく。

その中の最初の作品「バビロンの虜囚」では紀元前6世紀から現在に至るまで、バビロンという地で虐殺されてきた数多の人々を描きだす。積みあげられてきた悲しみの数々……。だが本当の悲しみは名前も奪われ、ひとかたまりとなって葬られた全体性の中にあるのではなく、いつのときも一人ひとりの内にこそある、4万5千人には4万5千個の悲しみがあるのだと詩人は静かに訴える。「もうその話はよしにして／仔と生き別れた雌じかの話をしよう。／／電光が走り／にわか雨は闇を叩く／姿が見えない仔じかを追って／涸れ川の流れを雌じかは渡る／赤く燃える空の方角へ／／バビロンは遠いの／燭はもう消える／／朝から灼熱／蟻の行列がわき目も振らず／罪徳の街へ／炎に囚われた声の／さんざめく方角へ／立ちつくす雌じか／のしゃがれた声／／燭が消える／どこなの　仔じかよ（「バビロンの虜囚」部分）」と。

続く作品「『荒地』の鹿」では、母鹿は生き別れの仔鹿を追ってウラル山脈を越える。そして「白い息を吐いて／朝靄の川に消えて行った無垢な背の斑点／別れしなに寄せた鼻先の／ほのかな腐臭／あれから記憶は眠りをさまよい／何処ともしれぬ荒無地の茨を縫い／若芽をむしりいくつも国境を越えた（「『荒地』の鹿」部分）」のち、ロンドンから北へ100キロのグランチェスターへと向かう。その草地の間に仔鹿は第一次大戦に参戦し、病死したイギリスの詩人ルパート・ブルック（1887～1915）に姿を変えて見つかるだろうという。「ひょっとしたらあそこなら見つかるかもしれない／ルパート・ブルックという青年が／古い牧師館の戸口から出てきて／川辺の草に寝て流れの遠くを見ているはずだと（「『荒地』の鹿」部分）」。しかし青年は「四月の陽にかすかな腐臭を残して」姿を隠してしまい、「復活の鹿を追う」旅は続く。

作品「灯台へ」では、鹿はヴァージニア・ウルフの小説『灯台へ』（1927年）の中の、ラムジー夫人の借りたスコットランドの別荘でひと夏を過ごす少女に姿を変える。そして、その少女は次には奈良春日山の孕みの鹿へと変身し、その眼は悲しげだ。それは紛れもなく慈愛に満ちた母の眼なのだ。「今日　孕み鹿に出会った／奈良春日山の裏道／（略）／ひとの気配に立ち上がってこちらを見た／釣り上がった大きな眼は悲しげな光りを湛え／近づくものに息を凝らしていた／／二十世紀の殺しの暗黒を越えて／色白の少女

の釣りあがった眼が／灯台へ／絶たれても絶たれても／どんなに憧れをはぐくんできたことだろう／少女が生きのびて／漁夫シモンの子を産んだというのは／おそらく事実だ（「灯台へ」部分）」と石原はその普遍的な母の像を描いている。

作品「子守りの鹿」の鹿は、終戦をむかえた日本に姿を現す。「ドクダミの葉を踏みしだき／獣の匂いを残して／鹿は姿を消していた／崖のとっつきまで続く足跡も／絶え間ないガレの崩落に途絶えていた／長い戦争があって／若い男が死に絶えた村の／八月の暗い土間のほのかな腐臭に／ふいに消えた鹿が柔らかな鼻先を出した（「子守りの鹿」部分）」ここでの鹿は平和の使者といえるだろう。

作品「鹿の目」では石原の開腹手術前夜の不吉な夢の後に、鹿は幻覚のように現れる。「深い羊歯の草地で目覚めた／柔らかな口が私の唇に近づき／ふくんだ水を咽喉に零した／鹿のほのかな腐臭が／ゆっくりと臓腑に流れていった／鹿は夜明けまで私の唇を濡らしていた／／開腹後／私は回復し／濡れた罪深い唇をゆがめて／獣の肝を啜えたりしている／訝しげにこちらを見つめる鹿の／大きな目をぼんのかぼに感じながら（「鹿の目」部分）」この鹿は石原を守る守護神でもあるのだ。

続く「雨降ってのちまた雲が広がる前に」では日常にひそむ狂気が次第に肥大化していき、その暴力に斃れる者の姿を生け贄にされた鹿として描きだす。「ふいに姿を消したまま神さまは／日暮れても帰ってこない／待ちくたびれて／誰かが石を投げる／次々に石が空の薄氷を割り／町の窓々を砕き／血に怯える小鹿の胸元にも飛んでいく／／闇の入口に／捨てられた牝鹿の首／その周りにいつか鹿たちが集まり／愛する仲間の首を闇の深くに曳いていく／そして黙って踊り始める／おお神のお帰り（「雨降ってのちまた雲が広がる前に」部分）」神の不在に人間はすぐに待ちくたびれて、いとも簡単に暴徒と化してしまう生き物だ。

章のタイトルにもなり、この章最後の作品「鹿の村」では戦争の近づく時代の無口な村の話が描かれている。無関心で凡庸な人々は鹿となって、やがて大政翼賛の波に呑みこまれていく。「近づいてくる戦争の話を、列車から降り立った男が煙草屋で声高に話した。戸口から顔を出して、村は春風に色めき立った。／／春祭りの夜、集まってきた村人たちは鹿であった。／鹿は広場のぼんぼりの周りを輪になって踊った。／しっこく絡む男の手から立ち上がって、鹿の女は大きな目で男を見つめ、広場に出て行った。肩で息をして女は踊り始めた。身籠もっていた。／鉄橋を渡り列車が近づいてきた。／鹿の村の話はその後聞かない。／今、通過したばかりなのに。」鹿の村は70余年を経て、再びこの国に出現しようとしてはいないだろうか？

最後に詩誌「山脈」123号（2008年発行）に掲載された作品「火事場の鹿」を見てみよう。

喉が火の手を上げ／這い出した煙が夜具を塞いでいる／隣に手をのばしたが咳に噎せて声が出ない／胸に火の粉が爆ぜている／添い寝の夜具から立ち上がったのは鹿であった／せわしい息で襟首をくわえ煙の雨戸を破った／曇の夜が白むまで煙は体を這い咳が続いた／首にかかる鹿の息は暖かく／燃える額を冷たいものが撫でていた／／曇が雪に変わり／咳の発作が治まった焼け跡に／鹿の姿はなく／かすかに焦げた髪の毛の匂いがあった／額を汚して少女は燻る木立の間にいた／吊り上った大きな目で雪を弾いていた／／君と過ごした河辺のスラム／神のいない長い夜に／背を向けた君の沈黙は凶器だった／夜明けに君は向こう岸へ／行方知れずの鹿になって渡ってしまった／それは遠い物語／鹿の神話へ帰りきれずにいる少女よ／帰れ神話へ／／日暮れまでに雪は止んだ／火事場の木立はまだ燻り／髪の毛の焦げる匂いがする／木の間を擦って近づいてくる風よ／帰れ／／ここにもうしばらく／生身のまま／燃える額に

高熱と激しい咳に苦しむ石原の前に現れたのは、またしても鹿だ。鹿の看護で咳の発作が治まると、鹿は一人の少女へと変身する。それは理不尽に奪われた幼き者のいのち、未だ神の国に立ち帰ることのできない彷徨ういのちの化身でもあるのではないか。「帰れ」は詩人の痛切な祈りだ。

石原詩における「鹿」はあるときはエロティシズムの象徴であり、またあるときは虐げられた人々、若くして逝った詩人や慈愛に満ちた母であり、守護神または彼岸に辿り着けない彷徨える少女であったりする。この詩人の「鹿」は自由に変容を遂げることのできる靈的な存在なのだ。そして、それはまた詩人の分身でもある。登山に熱中していた時期のある石原は、どこかの山で鹿との神秘的な出会いをしていたのかもしれない。(了)

第十八章

冬が過ぎました。それと同時に砲弾が大変良く落下した穴に、私たちが間もなく長くは止まらないとの噂が広がりました。或る夜、私がブランデーを飲んで美学談義をするために大尉の家に着いた時、大型トラックが荷造りされているのを見ました。それから私に、古文書が入った貴重な小箱と一緒に行く命令がありました。そして真夜中に電話局員たちの馬車で出発しなければなりませんでした。私は一時間程電話局の避難所で待ちましたが、そこで昔の知合いたちや、若い元気そうな顔付きの何人かの新しい知合いも発見しました。出発は全く自然に喜劇の一シーンの様相を呈していました。雲の中の月を想像して下さい。半分程明るくて道はでこぼこで、一台の馬車の中は集合した人間で一杯です。定められていた時刻丁度に出発しようとしていました。その時に残忍そうなパリ人の下士官が、黒い鞭を持ってメルクリウス（1）の台詞を言いましたが、それは死者たちを導き、そして威厳に満ちた声で呼ぶ者の声でした。「家族よ！」。直ぐに何人かの電話交換手たちは手にヘルメットを持って子供の様にして前に出ます。メルクリウスは続けて言います、「P. C. D. F.（前線の哀れで愚かな者たち）団体のメンバー諸君！」。私たちはヘルメットを脱いで全員が進みました。しかし、やっと私たちが儀式に従って覆われていたのは揺れた馬車そのものです。家族よ、そうではないのです。揺れに揺れて私たちは行きますが、三百メートル行った後で、穴の中で停止させられました。最悪なのは、敵の砲兵隊が目覚めたことです。激しい言葉がありました。でも、私は決して係わりませんでした。私の仕事はトラックの上で徹夜することでした。もう一人の伍長は馬を繋ぐ様に命令しました。しかしながら私は大変自然に間違いに気付きました。私たちは二対の馬を持っていました。馬たちは前もって命令で出発していたのです。泥土で馬たちの顔付きが既に臆病になっていた時（私たちの裡も臆病と言われていた様に）、馬たちの顔付きも緊張していたのです。従ってその努力は裂けて破れました。全員の顔立ちも緊張して出発しなければなりませんでした。そして私は、これが軍隊の決まりであると良く思います。これらの技術的引きは全てが完全に行われます。面白いのは、補給のための夜間はそれらの規定が忘れられることです。馬へ、そら右だ！そら左だ！と言うのが聞こえます。私が適当な概略を示して言っているのかどうか、あるいはその概略が何か他のものに達するのか私には分かりません。私たちはそこを出発しました。不気味な村から何も無い避難所の土手まで降りました。何も落下して来ませんでした。次にゆっくりと歩きましたが、長い休止もありました。砲手たちは砲架を平原用のものにするために、攻囲戦用のものを変えなければなりませんでした。それは巻揚機やロープを使って行う大変な作業です。決まった時刻に選定した地点に全てが集結されたやり方に、私は一度ならず驚嘆しました。軍隊の管理は如何なる間違いも決して許されません。何も忘れないことを学ぶのもそこです。取分け私は新しい仕事をする時には、私自身が失敗して顔を赤くする時が何度もありました。

その日の朝に、私たちは凍った泥で起伏の多いヴィニエヴィルの右側で、良く整えられた地点に着きました。数々の避難所は通過しましたが、危険で大きくなかったのです。時折り一発の砲弾しか私たちの処へ来ませんでした。が、々混乱しました。私がそこで過ごした一ヶ月間は、十二月と一月の間でしたが、負傷者が一人出ただけでした。その代わりに私たちは、酷い目に遭って泣かされた数々の砲弾を知る様になりました。新型でした。私は大尉と共に色々な破片や照明弾を見分け様としました。アンモニアの臭いを嗅ぎました。成果は遅くなりましたが、驚くべきものでした。私たちは一昼夜の間、アンモニアで涙を流していました。

大尉は、配属を変えないでも砲兵隊の命令を中尉に任せていて、私たちが分隊の長になっていた意味においては昇進していました。少し後になるとその命令は、作戦区の長官のものとなりました。私は大尉の

秘書でした。そして管理することを覚えました。砲弾と荷物の勘定を調べる如く、私には直ぐにそれらのおかしな困難を乗り越えるだろうと思えました。しかし、三日間での報告や六日間での報告を行うという小さな困難は沢山ありましたし、数字は毎週変わっていました。結局のところ十分に注意していても私は二、三回騙されましたし、大変恥を掻かされました。命令の命令には眼に見えない力があり、最小の誤りにも強力な指摘がありました。でも、T大尉は何も言いませんでした。しかしこの沈黙は雄弁でした。現実には私には正確に、如何なる下士官であってもその動きと同じ力がありました。何事においても見習い期間がなければなりません。一週間後に私は出来上がりました。しかし私は、容易な仕事が幾つあっても狂気の沙汰であるこの観念を既に余りに守りましたし、同様に狂気の沙汰の観念により直ぐに修正されましたが、困難な仕事も又幾つもありました。最初は全てが困難ですが、慣れることで全てが容易になります。そして、それは純粹数学の真実であり、食糧の補給の様に必然的なものです。知性とは、これらの様々な仕事を越えた働きでしかありません。それは殆ど慣れることを助けません。々仕事を困惑させるものもあります。私はそれに関係した人物の後を走った或る朝のことを思い出しますが、彼は重要な部品を欠いていた背嚢を背負っていました。それなのに私は離れることが出来ませんでした。砲手たちは私を嘲笑しました。彼らはまさに正しかったのです。無駄な動きが滑稽なのです。最終的に彼らは、私と一緒にいるのを大変自慢する様になりました。

告げ口をする人の様に、私は軍人の下っ端として大変自然に不信を抱かれるのですが、注目すべきことに私のお気に入りの地位に伴って、私には常に信頼があったことです。私が訊くことが出来たことを相手が繰返して言うのは、まさに何も私に不信が無いと思われているからです。この美德は私には当然のことです。従って私は自分の席があった避難所において、電話交換手や上等兵たちと仲良く生活しました。私は彼らにチェスのゲームを教えまし、敷線に関しては些細な問題でも解決するために彼らと一緒に働きました。何故なら、見知らぬ型の電話機や台やベルの装置が来たからです。私はその時、一人か二人の工員を観察しましたが、彼らは大変に高度な知性の観念を持っていたことを私は知りました。彼らの中の一人がチェスの駒の動かし方を覚えた時、それから後は何時も自分が勝つのを自信を持って確信していました。新型の装置と向かい合っても同じで、忍耐強く探している私を見ながらも、私の両手はそれをんでいた。そして、「これは全く簡単だ」と言いながらやってみて成し遂げるばかりで、他のことも話すのでした。そして実際にチェスで遊ぶ時も難しいことは何もありませんし、如何なる術策においてもそうなのです。しかし最初は部分部分によって知らなければならず、何も忘れてはならないのです。せっかちなことが唯一の欠点です。しかし誰もそんなことを思っていない。(完)

(1) メルクリウスは、ローマ神話の商売の神で、ギリシア神話のヘルメスに当たる。天文学では水星のこと。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲筑三（いずもつくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車 1000m タイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人 2000m 速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

北岡善寿（きたおかぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットントにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『榧』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こうゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノ P S T A 指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

神宮清志（じんぐうきよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近は視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌

「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高島りみこ（たかしまりみこ）

一九六〇年高知県生まれ、東京都在住。

日本詩人クラブ会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』（二〇一八年）

高村昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年からパブーの電子書籍に、随想集『アランと共に』（全3巻）及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』（全5巻）『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録中。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

長尾雅樹（ながおまさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

樺自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦逸雄（みうらいつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークル Circro de bellas artes で人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。 （以上）

同人誌風狂（ふうきょう）第56号

2019年3月21日登録

<http://p.booklog.jp/book/126301>

編集：風狂の会（担当：高村 昌憲）

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/126301>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト